

目次

1章 使役動詞・知覚動詞とその関連表現

使役動詞 1

〈1〉 S + 使役動詞 + O (主に人) + V' (原形不定詞) . 1

① make, have, let ② get, cause, force, compel ③ help

〈2〉 S + 動詞 + O (主に物) + 過去分詞. 2

知覚動詞 3

〈3〉 S + 知覚動詞 + O + V' (原形不定詞) . 3

〈4〉 S + 知覚動詞 + O + 現在分詞. 3 ・ 〈3〉と〈4〉の違い 3

〈5〉 S + 知覚動詞 + O + 過去分詞. 4

使役動詞・知覚動詞とその関連表現に関するその他の注意点 5

《発展》 have と get の目的語の後ろに置くことのできる品詞は様々であり、表すことのできる意味範囲もかなり広い 6

2章 副詞節・名詞節・形容詞節の時制

① 副詞節の時制 1

② 名詞節の時制 2

③ 形容詞節の時制 3

時制全般に関するの注意点 ・ 完了形と単純形について 3 ・ 過去完了形と過去形について 4

3章 「目的」と「程度・結果」を表す言い方

「SがS自らのために」というように、「目的」とする行為を行う主体が主語と一致するときの表現 1

程度「～するほどに…」または結果「(十分) …なので～」を表す表現 1

「Sが第三者のS'のために (=S以外のS'のために)」というように、「目的」とする行為を行う主体が主語と異なるときの表現 2

「結果」を表す ... so that ... 3

「目的」を表す不定詞についての諸注意 3

enough について 4

4章 文型について

前置詞で始まる句のほとんどはSやOにはなりません。(ただし不定詞は除きます。) 2

to be の省略について 3

副詞は修飾語 (M) にしかならないので、文型を考える際には常に無視します。 3

5章 不定詞の意味上の主語について

形容詞が人の性質・性格を表すものなら、for ではなく of を用います。 2

動名詞の意味上の主語について 2

6章 結論を早く言う

文型を中心とした文の構造を、できるだけ文頭に近い位置で明示しようとするのが英語の話者・書き手の基本姿勢です。 1

名詞句に対しては、形式目的語を使うことは普通はしません。 1

「文章」においても、やはり結論を先に述べます。 2

7章 否定語は繰り上がりやすい

- not A but B における not の繰り上がり 1
- 比較の構文における否定語の繰り上がり 1
- any (形容詞) や either (代名詞) を否定語の前に置くことはできません。 2
- 否定的な内容を表す副詞句の繰り上がり no longer など 2 in vain 2

8章 日本語と英語の修飾体系の違いについて

9章 他の要素に引かれて後ろにまわる (まとめられるものはまとめる)

- 英語においては、語と句の結びつきが強いとき、それらを一体として後置するのが普通です。
- 「語」としての副詞の他にも副詞句があるときは、それと一体となって文末に置かれる傾向が強くなります。
- The 比較級 SV, the 比較級 'SV'. の構文においても、「まとめられるものはまとめて前に出します」。

10章 疑問文・疑問詞

- 2つのかたちの疑問文 1
- 疑問代名詞を主語にすると常に単数扱い 1
- which と what の違い 2

11章 疑問詞と前置詞

- 疑問詞が前置詞の目的語となる疑問文では、前置詞は文末に置くのが普通です。
- 疑問形容詞の場合には前置詞を文頭に上げます。

12章 I don't think... 型の否定文など、「否定文であることを早く言う」ことに関して

- I think it will not rain. ではなく I don't think it will rain. とするのが普通です。
- 否定語の繰り上げができない例

13章 文否定と語句否定

- 「no single+名詞、no one+名詞」を主部にした文の訳の仕方 1
- 「not a single+名詞、not one+名詞、not a+名詞」といった例は普通、完全否定を表します。 1
- 「no + 比較級 + than」について 2
- 「no+比較級+than」では、強く否定するあまり、一般には「as+反意語の原級+as」に近い意を表します。 2
- not more than ... と no more than ... の数詞の前での使用例 2
- no more than ... は否定的な評価を含意して、「～にすぎない、～でしかない」(= only) の意をよく表します。 2

14章 部分否定

- 副詞には意味が強いものが特に多いので、英文の構造上、かなり頻繁に部分否定の文が出来上がります。 1
- 否定語の領域とは無関係に部分否定となる例も、特に形容詞・代名詞を中心に少なからずあります。 2
- both について 2 all について 2
- 否定文中での because-節について 3
- 否定文中での as-節について 4
- 否定文中で、かつコンマによって否定文とは縁切りしたかたちで置かれる肯定の as-節の多くは、though の意を表します。 5

15章 and か or か

否定文中での and	1	否定文中の or	2
肯定文中での and と or	4	譲歩を表す and と or	5
		同格や追加説明を表す or	6

16章 動詞 (概論)

17章 vi (英語の「自動詞」)

先行詞が place の場合には前置詞が省略されるのは顕著	1
受動的な意味を表す vi	2
This watch <i>needs repairing</i> . = ... <i>needs to be repaired</i> .	2
There is some work <i>to do</i> . と There is some work <i>to be done</i> .	3
John is hard <i>to please</i> .	3
Where is she <i>to blame</i> ?	3
The meeting is <i>to be held</i> next Tuesday.	3

18章 vt (英語の「他動詞」)

再帰用法 = vt の (意味の上での) vi 化 (= 転換自動詞 converted intransitive)	2
意味の上での vi へと変換するときには、受動態も用いられます。	3
日本人が become, get (to be), grow (to be), come (to be) などを使わないと安心できないところでも、ネイティブスピーカーは あつさり be-動詞ですませてしまうことがよくあります。	3
形だけの目的語を必要とする vt	4
that-節は一部の vt の直接の目的語となることを嫌い、it を要することがあります。	4

19章 what か how か

20章 「vt+副詞」か「vi+前置詞」か

21章 say と tell, speak と talk

22章 動詞に関するルールあれこれ

- ・ 特別扱いの動詞 have (と be-動詞) 1
- ・ 「よい意味の動詞」、「悪い意味の動詞」という単純な思い込みは禁物 2
- ・ 名詞をそのまま動詞化 2
- ・ 誤用されやすい動詞 2

come と go	2	doubt と suspect	3	influence と affect と effect	3	forget と leave	4
-----------	---	-----------------	---	-----------------------------	---	----------------	---
- ・ 「intended to have+過去分詞」について 4
- ・ 目的語が長いときには特に、目的語を vt の直後には置かない (= 副詞句が割り込む) ことが多くなる 4

「vi+前置詞句」の間にも他の副詞句が割り込むことがあります。 5
- ・ 動詞の省略 5
- ・ 目的語の省略 5

23章 分詞について

- 現在分詞 ① vi の現在分詞 1
 ② vt の現在分詞 2
 過去分詞 ③ vi の過去分詞 3
 完了の意を表す「be + vi の過去分詞」 3
 ④ vt の過去分詞 3

24章 助動詞

1. shall について 1
 2. will について 1
 ・ 「意志」や「拒絶・固辞」 1 ・ 推量 1
 ・ 「習性」、「特徴的な振る舞いや行動習慣」、「(物理的) 特性」、「当然」など 2
 3. 進行形のかたちで「進行」以外の意味を表す例について 2
 3-1. be going to-不定詞 及び be -ing について 2
 3-2. 進行形が表すその他の意味 3
 3-2-1. 「一時的な状態」を表す 3
 完了形と完了進行形について 3
 3-2-2. 「いや増す程度」を表す 4
 3-2-3. 繰り返される行為を表し、そのことに対する「いらだち」や「非難」を表すことも多い 4
 3-2-4. 「命令」や「拒否」を表す 4
 3-2-5. 「丁寧」な表現となる現在進行形・過去形・過去進行形 5
 4. must と have to の区別 6
 5. その他 ・ 否定の推量の can't と must not の違い 6
 ・ can と may の違いについて（「推量」や「可能性」を言うとき） 7
 ・ cannot / can't / can not の表記について 8

25章 be to-不定詞

- ・ 予定 1
 「was [were]+to-完了形不定詞」 2
 is to blame は普通は ... is to be blamed とはせずに、能動形ですませます。 2
 ・ 運命（結果） 2
 ・ 可能（不可能） 2
 ・ 意志 2
 ・ 義務・命令 3

26章 分詞構文

- 分詞構文の前にコンマを置かないことはよくあります。 1
 分詞構文の意味上の主語が主節の主語と異なる独立分詞構文には、主語を置くのが原則です。 2
 懸垂分詞構文 2
 慣用表現の独立分詞構文 3
 compared to ... や followed by ... 等は形容詞句としても分詞構文としても多用されます。 3
 前文の内容が分詞構文の意味上の主語になっている例 3

27章 副詞

副詞の配置一覧	1
1. 副詞が修飾するもの	2
2. 副詞の位置	4
2-1. 副詞の基本的な配置規則	4
2-1-1. 一般論 (副詞は被修飾語のできるだけ近くに置く)	4
2-1-2. 動詞を修飾する副詞の位置 (最も一般的な配置パターン)	4
① 動詞の直前に置きますが、be-動詞 (連結動詞) であればその直後に置きます。	5
② 助動詞があれば、最初の助動詞の直後に置きます。	5
③ 分詞・形容詞との結びつきの方が強い場合には、それらの直前に置かれます。	6
④ 副詞関連語句を一体としてまとめる	7
⑤ 副詞が後ろから前の名詞を修飾する例	8
⑥ その他の注意点	9
・ 比較級、最上級の意味を強めることのできる副詞	9
・ not と never の使い分けについて	9
2-2. 副詞の意味カテゴリーによる位置の違い	10
2-2-1. 時・時点、時間・期間、時間的前後関係、あるいは場所などを表す副詞	10
2-2-2. 発信者の考えを述べたり、これから述べる内容を提示したりするための副詞 (=文修飾の副詞) の位置	10
① 接続詞的な働きをする	10
② これから述べる内容の分野を明示する。または、どういう観点から述べるのかを 明示する	11
③ 発信者の考えや主観的な評価を述べる	11
④ 発信者の気持ちや感情を表すもの	12
文修飾の副詞の位置	13
2-2-3. 様態 (=物事のありかたや行為のありさま) を表す副詞の位置	13
2-2-4. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」、あるいは「主語の感情や意志を表す副詞」の区別	14
2-2-4-1. 副詞と形容詞による文意の区別	14
2-2-4-2. 「主語の感情や意志を表す副詞」について	15
2-2-4-3. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」の、位置による区別	15

28章 分離不定詞

29章 単純形副詞 (およびその関連表現)

30章 形容詞

1. 形容詞等を並べる順	1
・ 「一時的な状態を表す」例	3
2. any, every, each の使い分け	4
・ as ... as any ... について	6
3. a few, few に関して	6